

【資料1】王充『論衡』難歲第七十三

昔文帝出。過霸陵橋。有一人行逢車駕。逃於橋下。以為文帝之車已過。疾走而出。驚乘輿馬。文帝怒。以屬廷尉張釋之。釋之當論。

(昔文帝出で、霸陵橋を過ぐ。一人有り行きて車駕に逢ふ。橋下に逃げ、以て文帝の車已に過ぎたりと為し、疾走して出で、乘輿の馬を驚かす。文帝怒り、以て廷尉張釈之に属し、釈之當論す。)

【資料2】『史記』張釋之馮唐列傳第四十二

頃之。至中郎將。從行至霸陵。居北臨廁。……其後拜釋之為廷尉。頃之。上行出中渭橋。有一人從橋下走出。乘輿馬驚。於是使騎捕。屬之廷尉。釋之治問。曰。縣人來。聞蹕匿橋下。久之。以為行已過。即出。見乘輿車騎。即走耳。廷尉奏當。一人犯蹕。當罰金。文帝怒曰。此人親驚吾馬。吾馬賴柔和。令他馬。固不敗傷我乎。而廷尉乃當之罰金。釋之曰。法者天子所與天下公共也。今法如此。而更重之。是法不信於民也。且方其時。上使立誅之則已。今既下廷尉。廷尉天下之平也。一傾。而天下用法。皆為輕重。民安所措其手足。唯陛下察之。良久。上曰。廷尉當。是也。

(頃之(しばらく)して、中郎將に至る。從行して霸陵に至り、北に居りて廁に臨む。……其の後、釈之を拜して廷尉と為す。頃之して、上、行きて中渭橋に出る。一人有り橋下より走り出づ。乘輿の馬驚く。是に於いて騎をして捕へしめ、之を廷尉に属す。釋之、治問して、曰く、県人来るに、蹕を聞きて橋下に匿る。之を久しくして、以為(おも)へらく行已に過ぐ。即ち出づるに、乘輿、車騎を見て、即ち走りしのみ、と。廷尉、当を奏す。一人、蹕を犯す。罰金に当す、と。文帝怒りて曰く、此の人、親(みづか)ら吾が馬を驚かす。吾が馬、賴(さいは)ひに柔和なり。他馬ならしめば、固より我を敗傷せざらんや。而るに廷尉は乃(すなは)ち之を罰金に当す、と。釋之曰く、法なる者は天子の天下と与(とも)に公する所なり。今、法、此くの如し。而るに更に之を重くせば、是れ法、民に信ならざるなり。且つ其の時に方(あ)たりて、上、立(たちどこ)ろに之を誅せしめば則ち已まん。今、既に廷尉に下す。廷尉は天下の平なり。一たび傾かば、天下の法を用ふるもの、皆な輕重を為さん。民安(いづ)くにか其の手足を措く所ぞ。唯だ陛下之を察せよ、と。良(やや)久しくして、上曰く、廷尉の當、是なり、と。)

【資料3】唐・盧尚卿（中和二年「1182」登第）「東歸詩」七言律詩尾聯

（『太平広記』卷百八十六貢舉六所引『年号記』）

今日灞陵橋上過

今日 灞陵橋上を過ぎ

路人應笑臘前迴

路人 応（まさ）に臘前に迴るを笑ふべし

【資料4】『資治通鑑』卷二百六十二唐紀七十八・光化三年

是日。皆賜自盡。搏死於藍田驛。道弼、務脩死於霸橋驛。

（是の日、皆な自尽を賜ふ。「王」搏は藍田驛に死し、「宋」道弼、「景」務脩は霸橋驛に死す。）

〔胡三省註〕藍田驛在藍田縣。霸橋驛在長安城南。近霸橋。

（藍田驛は藍田県に在り。霸橋驛は長安城南に在り。霸橋に近し。）

【資料5】『三国志平話』卷中

復還本宅。將累賜底金銀。盡數封監。並印符文付與十個美人。又令人收拾軍程鞍馬。請二嫂上車。出長安。西北進發。却說曹相怒曰。想雲長如此重用。中不肯守我却於袁紹處去。曹相閉門三日不開。先知關公欲往袁紹處尋覓皇叔。內有心腹人。都是曹公耳目。相府不開三四日。曹相共衆官商議。有智囊先生張遼曰。先使軍兵於霸陵橋兩勢埋伏。如關公至。丞相執蓋與關公送路。關公但下馬。用九牛許褚將關公執之。如不下馬。丞相贈十樣錦袍。關公必下馬謝袍。九牛許褚可以執之。曹操深喜。先於霸陵橋埋伏軍兵。曹操、許褚、張遼都至霸陵橋上等候。不移時。關公至。丞相執蓋。關公曰。丞相不罪。關羽不飲。亦不下馬。又將錦袍令許褚奉獻。又不下馬。關公用刀尖挑袍而去。關公曰。謝袍。謝袍。前後無數十人。唬曹公不敢下手。雲長押甘糜二夫人車。前往冀王處。

（屋敷に戻ると、これまで重ねて下賜された金銀をすべて封印し、官印や文書を十人の美人に与えた。また行軍の準備をさせ、二人の嫂に載せる。かくて長安を出て西北に向かった。さて、曹丞相（曹相）は怒って言う。「雲長をかくも重用したと言うに、我が軍に加わらず袁紹の許に行くとは」。曹丞相が三日間門を閉じたままであったのは、関公が袁紹の許へ行き皇叔を尋ねることを知っていたからであった。関羽のところには曹公の腹心が入り込み、曹公の耳目となっていたのである。丞相府を三四日閉じたまま、曹丞相は衆官と協議する。智囊先生張遼が曰く、「まず軍兵を霸陵橋の両側に伏せ、関公が至ったならば、丞相は関公に送別の一献を与えるのです。関公が馬から下りたならば、九牛の許褚に関公を捕らえさせましょう。もしも下馬しなかったならば、丞相は十様の錦袍をお贈りなさい。関公は必ず下馬して袍の礼を言います。そこを九牛の許褚が捕らえます」。曹操は大いに喜び、霸陵

橋に兵を伏せ、曹操、許褚、張遼はみな霸陵橋の上で待ち受けた。ほどなくして関公がやって来たので、丞相は盃を執る。関公は「丞相お許しを。関羽は飲めませぬ」と言い、馬から下りようとしめない。そこで許褚の手から錦袍を送らせるがやはり下馬しない。関公は刀の切っ先で袍を引つ掛け、「袍を感謝いたします」と言つて立ち去った。周囲には数十人もおらず、驚いた曹公も手を下せなかった。雲長は甘糜二夫人の車を押し、冀王の許へ向かった。）

【資料6】『三国志通俗演義』（周曰校丙本）卷之二第六段「楊奉董承双救駕」

張済上表。請天子駕幸弘農。天子大喜曰。朕躬思東都久矣。今乘此得還。乃萬幸也。詔封張済為驃騎將軍、開府。済進糧食酒肉。供給百官。汜放公卿出營。催收拾車駕東行。遣舊有御林軍數百。持長伐護送。鑾輿夜過新豐。至霸陵橋。

（張済は上表し、弘農に移るよう天子に要請した。天子は大いに喜んで曰く、「朕自ら東都を思うこと久しい。この機に乗じて帰還できれば、これに勝る幸いはない」。そこで張済を開府驃騎將軍に任命した。張済が糧食や酒肉を献じてきたので、これを百官に分け与えた。郭汜は公卿を解放し、李傕は天子の車駕を整えて東へ送り出す。残っていた御林軍數百が長戈を携えてこれを護送した。車駕は夜に新豊を過ぎ、霸陵橋に至る。）

【資料7-1】『三国志通俗演義』（周曰校丙本）卷之三第十三段「関雲長千里独行」

①却說雲長所騎赤兔馬。日行千里。本是趕不上。②須要相傍車仗而行。不敢縱馬。按住絲韁。緩緩而行。③背後有人叫。雲長且慢行。關公自思想呼我字者。必不是害我之人也。④叫車仗從人。只管大路緊行。吾自理會。回頭視之。見張遼拍馬而至。⑤關公勒住赤兔馬。按定青龍刀曰。文遠莫非來擒我乎。⑥遼曰。吾身無片甲。手無軍器。何必生疑。丞相知兄遠行。特來相送。並無傷害之心。⑦關公曰。丞相此來。必有他意。遼曰。丞相已言彼各為主。勿追也。容兄自去以全其義。⑧為不曾相送。自輕身而來也。特令少弟先來請住兄長。⑨關公曰。便是丞相鐵騎來。吾願單騎決一死戰。⑩關公回數十步。立馬於霸陵橋上望之。見曹操引數騎。飛奔前來。⑪背後皆是許褚、徐晃、于禁、李典之輩。⑫操見關公橫刀立馬於橋上。令諸將勒住馬匹。左右擺開。

①さて雲長の跨がる赤兔馬は、一日千里を行く。本来は追いつけようはずもない。②しかし、「二夫人の乗る」車列についてゆかねばならぬため、馬を駆けさせるわけにもゆかず、手綱を引いてゆっくりと進んでいた。③そこへ「雲長、しばらく待たれよ」と背後から声がかかる。関公は「私の字を呼ぶということは、害意はあるまい」と考え、④車列の従卒に、「ひたすらに大路を急げ、私が何とかしよう」と命ずる。振り返って見れば、張遼が馬を急

がせてやって来る。⑤関公は赤兔馬を止め、青龍刀を提げて曰く、「文遠、私を捕らえに来たか」。⑥張遼「私は鎧も武器も付けていない。どうして疑われるのか。丞相は貴兄が遠方に行かれることを知り、送別にいらっしやるのだ。傷つけるつもりなどない」。⑦関公曰「丞相がここに来るといふことは、何か腹づもりがあるのだろうか」。張遼「丞相は『それぞれ主君がいるのだ、追ってはならぬ』と仰った。貴兄が立ち去って自らの義を全うすることをお認めになったのだ。⑧まだ送別をしていないゆえ、御自らこちらへいらっしやる。そこで、それがしを先触れとして兄者を留め置くよう命じられたのだ」。⑨関公「丞相が鉄騎を率いて来たならば、この命を賭して戦うまで」。⑩関公数十歩もどって霸陵橋の上まで来ると、馬上から望見した。曹操が数騎を率いて、飛ぶようにやって来る。⑪背後に従うのは許褚、徐晃、于禁、李典のみであった。⑫曹操は、関公が橋の上にて馬に跨がり刀を構えているのを見るや、諸将の馬を止め、左右に並ばせた。」

- ⑦
- (周) 關公曰。丞相此來。必有他意。遼曰。丞相已言彼各為主。勿追也。容兄自去以全其義。
- (李) 關公曰。丞相此來。必有他意。遼曰。丞相已言彼各為主。勿追也。容兄自去以全其義。
- (毛) 關公曰。丞相此來。必有他意。遼曰。丞相已言彼各為主。勿追也。容兄自去以全其義。
- (朱) 關公曰。丞相此來。必有他意。遼曰。丞相已言彼各為主。勿追也。容兄自去以全其義。
- ⑧
- (周) 為不曾相送。自輕身而來也。×特令少弟先來請住兄長。
- (李) 為不曾相送。自輕身而來也。×特令少弟先來請住兄長。
- (毛) 為不曾相送。自輕身而來也。×特令少弟先來請住兄長。
- (朱) 為不曾相送。自輕身而來也。故先令少弟×請住兄長。
- ⑨
- (周) 關公曰。便是丞相鐵騎來。吾願單騎決一死戰。
- (李) 關公曰。便是丞相鐵騎來。吾願單騎決一死戰。
- (毛) 關公曰。便是丞相鐵騎來。吾願×決一死戰。
- (朱) 關公曰。便是丞相鐵騎來。吾願單騎決一死戰。
- ⑩
- (周) 關公回數十步。×立馬於霸陵橋上望之。見曹操引數×騎。飛奔前來。
- (李) 關公回數十步。×立馬于霸陵橋上望之。見×操引數×騎。飛奔前來。
- (毛) ×××××× 遂立馬於×橋上望之。見曹操引數十×騎。飛奔前來。
- (朱) ×公回數十步。×立馬於×橋上望之。見曹操引二十餘騎。飛奔前來。
- ⑪
- (周) 背後皆是許褚、徐晃、于禁、李典之輩。
- (李) 背後皆是許褚、徐晃、于禁、李典之輩。
- (毛) 背後乃是許褚、徐晃、于禁、李典之輩。
- (朱) 背後皆是許褚、徐晃、于禁、李典之徒。
- ⑫
- (周) 操見關公橫刀立馬於橋上。令諸將勒住馬匹。左右擺開。
- (李) 操見關公橫刀立馬于橋上。令諸將勒住馬匹。左右擺開。
- (毛) 操見關公橫刀立馬於橋上。令諸將勒住馬匹。左右排開。
- (朱) 操見關公橫刀立馬於橋上。令諸將勒住馬足。左右擺開。

【資料8】渡邊義浩『関羽 神になった「三国志」の英雄』88〜90頁

また、曹操が都を置いた許県は、現在の河南省許昌市にあたるが、魏の「古都」として「町おこし」を目指している。許昌市の観光の目玉は、関羽が早々に別れを告げたとする灞陵橋である(図7灞陵橋の関羽像)。『演義』には、二人が別れた橋の名は記されない。そもそも許昌における同橋の本来の名は、八里橋という。本来の灞陵橋は長安にあり、長安の灞水に架かった橋で、皇帝陵の近くにあるためこの名がある。許の橋に灞陵橋という名がついたのは、『三国志平話』において関羽と曹操の別れの場面が、長安と設定されていたためである。嘉靖本『三国志演義』は、関羽の出発した地を長安から許に改めた。しかし、別離の場として、灞陵橋という名は残されたままであった。毛宗崗本は、誤りに気づいたのか、名を削除している。したがって、許昌の八里橋は、初期の三国物語の影響を受けて灞陵橋と改名されたことになる。『三国志演義』が様々な話を組み合わせ、何度も変化を遂げていくうちに、橋の名が追いつきぼりにされたのである。

【資料9】元・関漢卿「関大王单刀会」雜劇・同前三折

「么篇」你道先下手強。後下手殃。一隻手摺住寶帶。臂展猿猱。劍扯秋霜。他待暗暗藏。我索緊緊防。都是狐朋狗黨。小可如我千里獨行五關斬將。

(先手必勝後手必敗。片手で宝帯を掴んで腕を伸ばし、抜けば玉散る氷の刃。彼奴が陰陰待ち受けるならば、こちらは緊緊防ぐまで、みなるくでもない犬ころども。千里を独り行き、五関に將を斬った私に敵うものか。)

「快活三」小可如我攜親侄訪冀王。引阿嫂覓蜀皇。灞陵橋上氣昂昂。側坐在雕鞍上。

(甥御を連れて冀王を訪ね、兄嫁率いて蜀皇を探す。灞陵橋上意気軒昂、身を傾けて馬に乗る。)

「鮑老兒」戰鼓才搥斬了蔡陽。血濺在沙場上。刀挑了征袍。離了許昌。癱了曹丞相。向單刀會上。對兩朝文武。更小可如三月襄陽。

(戦太鼓のなる間に蔡陽を斬り、その血飛沫は戦場に散る。刀に戦袍を引っ掛けて、許昌を去れば曹丞相は仰天す。单刀会に赴いて、文武百官居並ぶとも、三月の襄陽会よりマシというもの。)

【資料10】「関雲長千里独行」第四折「殿前飲」

若不是這漢雲長。則為俺這家屬不得已可便詐投降。(劉末云)他受他封官來。(正旦唱)壽亭侯官職無心望。甚的他快樂的這心腸。(云)那一日與曹操飲酒。聽的說主公與小叔叔在此。收拾便行。

(唱)他封金印出許都。(帶云)曹操趕至灞陵橋。三計要拿雲長。二叔叔致怒。(唱)險唬殺那曹丞相。

錦征袍便斜挑在他刀尖上。(帶云)若不是二叔叔。俺三房頭家小。都落在曹營。(唱)怎能夠那弟兄

毎完衆。也不能夠今日得這還郷。

(もしもこの雲長がいなければ、我ら家族は頼るものなく、故にいつわり投降したまで。「劉末セリフ」あやつは官爵を受けたであろうが。「正旦歌う」寿亭侯、官爵などは臨んでおらず、樂しむ心は起こらない。「正旦セリフ」あの日、曹操と酒を飲んでおりましたが、主公と張飛殿がここに居られると聞き、すぐさま出發いたしました。「正旦歌う」彼は金印を封じて許都を出立、「セリフ」曹操は灞陵橋まで追つて来て、三つの卿で雲長を捕らえようとする。かえつて雲長殿は怒り心頭、「歌う」曹丞相を仰天させ、錦の戦袍は刀の上、「セリフ」もしも雲長殿がいなければ、私たち三人はみな曹操軍に捕らえられていたでしょう。「歌う」兄弟再会望みななく、故郷に帰るもままならず。)

【資料11】明・朱有燾「新編関雲長義勇辞金」雜劇・第三折

〔転調貨郎兒〕涼時候秋風八月。向郊外車兒慢拽。遠山遙臨曉雲遮。楓林赤。鴈行斜。極目向天涯一望賒。

(旦云)這郊外秋景淒涼。好是感懷也。却不知這路從八里橋那邊去。(末云)過了八里橋投東去。這秋湖往東。皆無人烟荒草陂也。

(秋風の吹く涼秋八月、郊外に向けゆるゆると車は進む。はるかみ遠山を臨めば曉雲が垂れ込める。楓の林は赤く染まり、雁の斜めにかすめ飛ぶ。はるかに眼をやれば見わたす限りの天涯の景色。

〔旦セリフ〕寂寥たる郊外の景色は悲しみを誘う。八里橋の先はどこへやら。〔末セリフ〕八里橋を過ぎ、秋湖を東へ行けば、あとは見渡す限りの無人の荒野でござる。)

【資料12】『三国志通俗演義』(周日校丙本) 卷之三第十三段「関雲長千里独行」釈義

灞陵橋在陝西西安府城東霸水上。漢時送行者多至此。折柳贈別。

(灞陵橋は陝西西安府の城東、霸水のほとりにある。漢代、見送りの人々はここまで来て、柳を居つて送別の贈り物とした。)

【資料13】同前卷之三第十三段「関雲長千里独行」

關公請二嫂上車。辭別胡華。披甲提刀上馬。投洛陽來。前至一關。名東嶺關。把關將。姓孔。名秀。是曹操部下將。引五百軍兵。在嶺上把隘。此是三州隘口。

(関公は二人の嫂を車に乗せるや、胡華に別れを告げる。鎧を着、刀を提げて馬に跨がり、洛陽を目指した。その前には一つの関があった。名を東嶺関と言う。守將は姓を孔、名を秀

と言ひ、曹操の麾下である。五百の兵を率いて峰の隘路を守っていた。ここは三州の関門なのである。

【資料14】『説岳全伝』第五十六回「述往事王佐献図 明邪正曹寧弑父」

鼻高眼大。豹頭燕頤。膀闊腰圓。身長八尺。一部落腮鬍子。滿臉渾如黑漆。若不是原水鎮上王彦章。必定是灞陵橋邊張翼德。

(鼻高く眼大きく、豹頭燕頤、肩幅広く腰は円く、身長八尺にして、顎には長髯、顔は漆を塗ったように黒い。原水鎮の王彦章でなければ、灞陵橋の張翼徳と言ったところ。)

【引用文献】

- ① 『論衡』(『四部叢刊初編』子部)
- ② 『史記』(中華書局排印本、一九八九年)
- ③ 『太平広記』(中華書局排印本、一九六一年)
- ④ 『資治通鑑』(中華書局排印本、一九五六年)
- ⑤ 『至治新刊全相平話三国志』(国立公文書館デジタルアーカイブ)
<https://www.digital.archives.go.jp/DAS/pickup/view/detail/detailArchives/0503000000/0000000810/00>
- ⑥⑦⑫⑬ 『北平旧蔵周日校刊本三国志通俗演義』『周日校丙本』(『三国志演義古版叢刊続輯』所収影印本、全国図書館文献縮微複製中心、二〇〇五年)
- ⑦ 『李卓吾先生批評三国志』(『対訳中国歴史小説選集』所収影印本、ゆまに書房、一九八四年)
- ⑦ 『三国志演義』(『毛宗崗本』(中華書局排印本、一九七一年)
- ⑦ 『双峰堂本批評三国志伝』(『三国志演義古版叢刊五種』所収影印本、中華全国図書館文献縮微複製中心、一九九五年)
- ⑧ 渡邊義浩『関羽 神になった「三国志」の英雄』(筑摩選書、二〇一一年)
- ⑨ 「関大王单刀会」雑劇(『新校元刊雜劇三十種』所収排印本、中華書局、一九八〇年)
- ⑩ 「関雲長千里独行雜劇(『全元雜劇三編』所収影印本、世界書局)
- ⑫ 「関雲長義勇辞金」雑劇(『明代雜劇全編』所収影印本、上海書店出版社、二〇二〇年)
- ⑭ 『説岳全伝』(上海古籍出版社排印本、一九八五年)